

明るさを届けたい

静岡県立伊豆総合高等学校 電気電子工学科 3年
松井 奏人

昔、私の家で停電が起きました。その日は台風で外は雨風が強く、雷も鳴っていました。

父が「もしかしたら停電するかもしれない」と呟いたわずか数秒後のことでした。激しい雷鳴とともにブレーカーが落ち、すべての電気機器がその仕事を放棄して、私の視界は真っ暗になりました。前日から遊びに来ていた幼い姪は怖かったのでしょう、私に必死に抱きついてきました。それから5分、10分と非常用の懐中電灯の周りに家族で集まり、心細い光だけを頼りに、じっとして過ごしました。やがて、限界が来たのか姪は顔を歪めると、泣き出してしまいました。

私は姪を宥めつつ「復旧は何時間後なのだろうか、1分以上停電しているのは初めてだけれど、きっと1時間や2時間はかかるのだろうか」と考えていました。しかし、私のそんな考えは良い意味で裏切られることになりました。そんなことを考えた矢先、ぱっと部屋の明かりがついたのです。大体、停電から20分程度だったかと思います。私に抱きついていた姪は顔をあげ、部屋の天井でこうこうと輝く電球を見つけると、先ほどの暗い表情から一変、電球と同じような明るく、輝くような笑顔を見せてくれました。

私が「あれ、もう点いたんだ、早いね」と言うと、父が「そうだな、昔はもっと遅かったけど、今はすごく早いな。とても人の手で直しているとは思えない」と感心するように言いました。

後日、停電してしまった原因は、台風の影響で電線が切れたためだと知ったのですが、そこで私は驚きました。確か父は「人の手で直している」と言っていたはずです。あの吹き荒れる雨風の中、本当に人があんな高い所にある電線を直したのだろうか。にわかには信じられない話でした。

しかし、高校生になり、電力会社に職業体験に行かせていただいたとき、それは真実なのだと知ることになりました。社員の方の1人が「台風や大雪の時でも休む人はいないよ、むしろ、そういう時にこそ変わらず電気を届けること。それが私たちの仕事なんだ」と仰っていたのです。

凄い、と思いました。台風の中、危険な状況でありながら私たちに電気を届けるため現場で作業をする。そうしなければ私たちのもとに明かりは戻らない。電気技術者の方々の仕事は大変で、且つ責任が伴う仕事なのだと感じました。同時に、私の中に将来自分もこの職業に就きたいという思いが湧いてきました。夢を実現させるための一歩として、私は、必要な資格について調べてみることにしました。

本やインターネットを使用して調べてみたところ、9種類ほどの資格が見つかりました。私はその中からいくつかの資格を選びその資格を取得すべく勉強を始めました。

勉強は大変で、学校の授業ではまだ取り扱っていない箇所もありましたが、そこは先生に聞くなどして対処しました。現段階では資格取得は厳しいかと思われ
ますが、私は諦めようとは思いません。

私の夢はあの台風の日の時のように、困っている人たちに笑顔と電気を届ける
電気技術者になることです。